

## 伸びやかな校風・会長就任にあたって

会長 堀田康彦（一五期）

このたび斉藤勇一、中村爽、三浦器允歴代会長の後を受け会長に選任された昭和三八年卒業の堀田康彦です。同窓会役員としては中村年度発足後に原田副会長（当時・物故）が排球部先輩だったことから指名を受け前期まで副会長を務めてまいりました。我々の一五期は相当早くから同期会を立ち上げて城南生の交流を楽しんでおりますが、卒業生があまねく同期・同窓の交流をエンジョイされるように役員の方々と知恵を絞ってまいり所存です。

私が城南高校の門をくぐったのは六〇年安保が最高潮に達する時でした。神田からの通学路は都電で新橋、虎ノ門、材木町の経路でしたが、連日の激しい学生デモが国会周辺を取り巻き学生の樺美智子さんがその中で死亡するという異常な雰囲気を目にし、高校でもアジ演説をする生徒がいて大きなカルチャーショックを受けました。

また校内では生徒の自主性を重んじ、生徒会や様々な部活動が幅広く行われていて、天文部や山岳部など中学生生活直後の身には異次元の世界に感じました。

先生方も自由闊達に授業を進めておられたことは後年学校関係の活動に携わって他校との比較から感じたことです。酒瓶が無造作に置いてある教官室もありました。

安保条約成立後岸政権退陣、池田内閣で所得倍増政策が謳われ、中山マサ厚生大臣が初の女性閣僚に就任するなど大きな時代の転換点でした。東京オリンピック、オイルショック、ドルショック、ジャパンアズナンバーワン等時代の背景を感じさせる言葉も今は懐かしく感じます。

我が城南は都立高校の学校群制度導入や広域人事など様々な時代の波に洗われながら、平成一六年に閉校した経緯は朝日新聞二〇〇七年五月一四日夕刊の「メガロポリス」欄に詳述されています。

同窓会の使命は母校の発展に貢献し、卒業生の交流に資することと考えておりますが、母校なきあとは後者の活動が中心となりました。朝日紙にありますように戦後の父母会が努力した校地拡充の恩恵が同窓会にも及び現在の活動資金となっておりますが、その資金も現在の活動内容では徐々に目減りし、最終卒業生の時代にまで引き継ぐことは寄付金制度その他の継続に繋がる努力無しには困難です。新しい会員が増えない構図の中で、伸びやかな校風・城南高等学校の息吹を次代に手渡すため、資金、人材（役員）の拡充を図りながら、役員諸氏に負担の少ない省エネ運営にも意を用いてまいりますので、会員の皆様の力強いご協力とご理解をお願いし就任のご挨拶といたします。

※HP 掲載用に横書きにしてあります。